

# 桃太郎の誕生

柳田 國男



# 桃太郎の誕生



## 一 知られざる日本

これは最初はただ自分一人の楽しみのために、手をつけてみた研究であるけれども、今に及んでは誰か聴いてくださる方をさがしてあるく必要を感じずる。桃太郎の鬼が島征伐などという昔話は、すでにお互いの家の子供すらも、その管理を辞退するほどのたわいもないものではないが、なおそれがひとり日本現代の一つの問題である

のみでなく、実際はやはりまた世界開闢以来の忘るべからざる事件として、考察せらるべきものであつた。しかも壮年の学者が全力をこれに傾けてさえも、なお五年や十年では整理しきれぬほどの材料が、われわれの邦には保存せられていた。それがこのごろになつてようやく明らかになつてきたのである。この研究の後半分だけは、ぜひとも志を同じうする何人かに引き継いでおく必要がある。私が強<sup>し</sup>いてこの不完全なる研究を発表するのも、本願はこれよりほかにはない。

われわれの昔話の中でも、特に外国における斯道<sup>しどう</sup>の学

者を感動せしむべきものは、英国でいうシンドレラ、グリム童話の灰かつぎ姫、日本で糠福米福などと呼んでい  
る物語であつた。これがわがくにに入つてきてから、い  
かに短くても千年はこえているだろうと思ふが、話はそ  
の間にまことにわずかばかりしか変化を受けていない。  
蜜柑の皮を遠くから妹に投げつけたというような、些細  
な点までがなお残っている。そうして北は青森県のさび  
しい村から、南は壱岐島の海端にまで、数多く分布しか  
つ今も活いきている。英国のシンドレラ研究者ミス・コッ  
クスが、もしこの事実を知っていたならば、彼女の記念

碑的名著も必ず若干はその体裁を改めていたことと思われる。故厨川白村君などは、日本に彼女の目の届かぬ一隅があることに心づいて、柳田のごときはなぜ早くこれを説こうとせぬかということ、かつて『大阪朝日』紙上で注意せられたこともあったが、実はそのころまではまだ私なども、そう大きな問題とも思っていなかったのである。それに国内の蒐集が、いつこうに進んではいなかった。今とてもけっして豊富とは言われぬが、とにかくに新たな材料によって、その後明らかになってきたことがいくつもある。文学すなわち記録文芸のうえでは、



この話は普通に「紅皿欠皿」の名をもって知られている。馬琴の「皿皿郷談」べいべいきようだんなどはまったくこれによつたもので、話を美作みまさかの久米の皿山の歌に結びつけたのも、彼が独創に出でたる趣向ではなかつた。今ある『住吉』『落窪』の物語をはじめとして、日本に最も数の多い継母話の原もとの種も、おそらくはこれと無関係に生れ出たものではなかつた。ドイツのグリム研究者たちが、日本の類話として採録しているのは、『御伽草子』の「鉢かつぎ姫」ただ一つであるが、これも姥皮うばとか墓がまの皮とかの形になつて、ひろく民間に行なわれている。ドイツではこれを

アルレライラウフ（千枚皮）、フランスではポーダアヌ（驢馬の皮）、英国ではまたキャッツスキン（猫の皮）などと称えて、共に灰かつぎ姫譚から派生した一傍系であることは、コックスもすでにこれを述べている。ただ彼らはわれわれの草子以外の文芸を、知るべき機会をもたなかっただけである。

日本民間の口承文芸においては、シンドレラは奥州南部の「糠子米子」、または津軽の「粟袋米袋」等の名をもつて伝わっている。これと並び行なわれている多くの継子いじめの話で、姉妹の名前がお銀小銀、またはお月

お星だの葦子萱子だのと、二つ相對するものの名になつてゐるのも、すべて「紅皿欠皿」の系統を伝うて、やや目先きをかえようとしたものらしい。しかもその継子のままこシンドレラが台所へ追ひ下され、始終火焚き番をして灰まみれの汚い衣を着ていたという点は、まだこの温暖の国に来て、脱ぎ棄ててはいないのであつた。今までこの説話の研究者たちが、大切な分類の標準にしていた一つの点は、幸運な心がけのよい美しい継娘を保護する者が、ある一つの動物であつたか、亡くなつた実母の霊であつたか、はたまた当人の守り神であつたかで、この特

徴の異同によつて、個々の民族の伝承する説話の親疎、伝播の経路を尋ねることができるようになつて考へられていた。ところがその方法のすこぶる心もとなつてきたわけは、日本にはまさしく右三つの型が共に現存するからであつた。前の目安を信頼するとしたら、このくにへは三口別々の隣国から、前後して持つてきたという結論になるので、そんなことは容易に信じがたい。だから尊敬する外国の篤学者でも、おりおりは誤つたことをいうものと承知しなければならぬ。それというのが渉獵は広くても、一つの国民からさういくつもの資料は得られず、

得られたものだけによって一応は意見を述べようとするからで、したがって誤謬ははじめから新資料の発見によって、訂正せられるようにできているのである。それを受売りするほど愚劣なことはない。これからもどんな変わった標本が出てこぬとは限らぬが、とにかくに日本での採集によって知れてきたことは、この世界的に著名なる一つの昔話が、わがくににおいてもまだまだ比較的まとまった形で保存せられていたことと、それが継母話のやや残酷に過ぎたる一種を発生せしめた以外には、特に他の多くの説話の上に、これという影響感化を与えてはいなか

つたらしいといふこととである。

## 二 民譚二種

それから今一つ、ヨーロッパではかなりもてはやされている昔話に、「古風なる死人感謝譚」（ルモールルコンネツサン）というのがある。あるいはまた「歌うたう骸骨」ともいって、その死人が髑髏になつて歌つたり過去を語つたりしたという話が多い。これなども『日本靈異記』の昔から、よくまとまつた形で久しい間、ひろく

われわれの中には伝承せられていた。私はこの事実を解して、この種の説話が夙<sup>はや</sup>く神話信仰の時代を去り、一箇言語の芸術となつてしまつてから後に、この日本民族の間に運び込まれたことを、意味するものであるかと思つている。もちろんそれを断定するためには、まだまだ数多くの類例を集積してみなければ安全でないが、少なくとも今日お互いが一括して昔話、もしくは民間説話と名づけているものの中に、こういう国際的類似のいちじるしい若干がある以外、これと対立して国内限りで、思いついて変化をしているものがあることは事実である。

これは一般の芸術發生の法則とも関連しているものであろうが、説話にはとにかくその成熟期とも名づくべきものがあつて、個々の風土環境と社会生活の段階により、ないしは説話そのものの各自の性質から、国ごとにちがった年齢をもち、ちがつた経歴を持ち、したがつてその伝播の様式にも、幾通りかの差異があり得たのである。大体にこれを輸入の時代の前後と言つてしまえば解りはよいだろうが、中には遅く持つてきてもなお芸術となりきつていない方面から来たものもあるうし、他の一方には早く入つたものにもすでにこの成熟期を過ぎて、熟し



た果実として受用せられたものもあり得るのである。われわれの「灰娘」や「歌うたう骸骨」などは、ちようどこの第二の場合に属していたゆえに、その渡来後の変化が案外に少なかつたのではないかと思う。

これとは反対に、西洋でも数多く知られている「異類求婚譚」(ラベルエラベット)、すなわち人間の美女または美男と、鳥獣草木などの人でないものが縁を結んだという昔話などは、日本一国の内においても非常な変化発達をとげ、しかもその経路が今もなおおおよそは跡づけ得られる。たとえば幼少な者が笑いそぞろいて聴く

猿聳入のおどけた話から、遠くは三輪山箸墓の伝説と、筋の続きを認められる敬虔なある旧家の昔語りまで、現にその進化の中間の十数段階が、地を接して同時に併存しているのである。神話に関する学問は、将来この採集が進み比較が容易になり、同時にどれが古く、どれが新らしくその次に変ったのかを測るための、一定の尺度が具わるに至って、おもむろに改造せらるることと私などは信じている。今日のいわゆる神話学は、いわば今集まってきた民間説話の中に、まじって伝わっている神話的分子を取り扱っているので、必ずしも神話でもない昔話

を研究の対象として、これが神話であると強弁しようというのではないが、たまたま二者の分界を明らかにすることを怠った結果、なんだか異様な言葉の用い方、たとえば国の歴史を神話と言ってみたり、そうかと思うと「桃太郎」や「かちかち山」の類までを、神話の大系にさし加えたりする者を生じたのである。語原から言っても、神話（ミート）は本来神聖なものであった。定まった日時に定まった人が定まった方式をもってこれを語り、聴く者がことごとくこれを信じ、もしくは信ぜざる者の聴くことを許されぬ古風の説話であった。それとこ

の退屈なときにまたは人が耳を楽しましめたいときに、随意に所望し得た話の芸術と、二者が類を同じくせざることは誰にでもわかりきっている。ただ耶蘇教国の人々だけは、従来文化は平押しに、新しいものが進み古いものが退いたと解していたゆえに、説話時代の神話を認めることができず、ましてや神話時代にもすでにあった民間説話などは、これを想像してみることもできなかつた。そうして昔話が神話の孫子であることをのみ、ただひたむきに信じたかつたのであるが、仮に孫子であつたとしても、同人でない以上はちがつた閱歴を持っているはず

である。だからこれを混同してよろしいなどとは一人だ  
つて言つてはいない。他に方法がないならこれによつて、  
彼を尋ねようとしていただけである。

ところがわれわれの生れた国においては、今でもまだ  
この二つのものが、それと因縁の深い「伝説」と三つ巴  
になつて交錯している。もちろんその三つの中でも神話  
だけは、数も少なく出現の機会も稀であり、また非常に  
荒れすさみかつ不純になつてはいるが、とにかくにこれ  
から伝説と民間説話へ、移り動いていった足取りだけは  
見られる。それにはこの「異類求婚譚」、その中でも殊

に「蛇の聳入」の話などが、かなり豊富に手頃の材料を供するかと思う。私はこの説話を整理するために、婚姻慣習という一つの物差しをあててみようとしているが、同時にまたその多くの類型の比較は、われわれの婚姻制の変遷を解説せんとする者に、いくつかの暗示を投げてくれるようである。

### 三 童話の起り

「桃太郎」の昔話なども、日本に根を生じてからよほど

年久しいと見えて、その樹は何代となく生い代って、もう本の株は枯れている。したごうて神話時代の桃太郎原型は、「蛇髻入譚」のごとくにはわれわれの目に触れるところに残っていない。そのかわりにはまた一方の「糠福米福」などともちがって、近世に入ってからの変化が最も著しく、その色々の形が隣を接して併存するがために、これにもとづいてこの口碑の永年にわたった経過を、大体は推測することを許されているのである。私などの見たところでは、この昔話成長の三つの変化、すなわち、

一、説話が上代において夙く芸術化し、そのやや成熟した形においてひろく流伝していたもの、たとえば「死人感謝譚」や「紅皿欠皿」話

二、説話の信仰上の基礎が全く崩壊せず、したがってこれを支持した伝説はもとより、その正式の語りごとがなお幽かすかながら残っていたもの、たとえば「蛇聾入」のごとき一部の「異類求婚譚」

三、最後に説話が近世に入って急に成熟し、元の樹の所在は不明になったか、まだその果実の新鮮味を失わぬもの、たとえば「桃太郎」「瓜子姫」説話の類



こういう二種類、三様式の説話が、入りまじって共に行なわれているということとは、比較研究者にとってこのうえもなく便利なことである。グリムも伝説の若干は集めているが、それはもう痕跡であり、また彼の家庭童話とは関係のないものであった。説話が近いころまで信じられていた島々はあるが、それも白人が近よってきたころから、一時にことごとく娯楽用のものになろうとしている。こんないろいろの標本の揃っていた国は、日本以外にけっしてそう多くはないということとは、やがて世人が心づく時が来るであろう。

日本は果たしてそういう国であつた。殊に近世の二百年ばかりの文明が、そういう状態を作り上げるのに適していた。江戸期から明治の中頃までにかけて、都市の生活だけがひとり大いに進んだのみならず、またその中でも一部の者と、村に住するごくごくの少数だけが文字を知っていた。読書階級はほとんど別種族の観があり、新らたなる普通教育は単にその生活を、なるべく多数の者に模倣せしめようとしたに過ぎなかつた。事実大部分の俗衆は残されたる者として生活していた。文芸に対する態度も明らかに二様あつた。たとえば演劇の歴史として

今伝わっているものは、わずかばかりのいわゆる見巧者の記録であつて、これ以外に別に舞台に躍り上つて赤面の役者を斬ろうとした田舎武士の逸話さえもあつた。町にもまた最初から泣くつもりで、鼻紙を多量に用意して行く芝居見物人が居た。井沢蟠竜軒の『広益俗説弁』などは、中古以来の語り物や説話を多く掲げて、ことごとくこれ小説なり信ずべからずと弁じている。すなわちその訓戒しないと信ずる人が多かつたのである。あるいはこれが足利時代からの、諸道の職人と百姓との別れ目であつたのかも知れぬが、とにかくわれわれの一つ前まで

の社会には、なんでも茶にしたり趣味にしたがる人々と、ただ生真面目にしか物の見えぬ人々とか、相対立して生を営んでいたもので、今日はただその一方からの観察だけが、文献として伝わっているので、農民芸術は全く別の足取りをもって進んでいた。この二種のもの融合が、珍しい世相の混乱を生じたことは、ちやうど冷温二つの潮流の行き逢う海に、ガスが立つのも同じわけであった。その中でもただ名前ばかりでは見当のつかぬものにも、このごろよく使用せられている「童話」という語がある。日本では口承文芸の童話化ということとは、どう考えてみ

ても古いことではない。少なくとも子供のための話または子供に向く文芸、そんなものは元は村にはなかつたと思う。子供の遊びは本来が自治であつた。彼ら自身の能力にかなう発明と保存、それよりも盛んであつたのは模倣である。前代の大衆教育は一般に、ちようど今日とは正反対の傍観傍聴主義であつた。成人の言うこととすることの中から、各自の年齢に応じて学び得るものだけを汲んでいた。だからまた今よりも早く一人前になり得たのである。しかしいくら昔だつても子供は話をせがんだであらう。だだを捏こねれば爺婆はすかそうとしたであらう。

彼らばかりとの会話は平易であつたろうという人があると思うが、それはそのとおりとしたところで、そのために話は作ることができない。なんとすれば話は話す人の持っているものだけ、かつて自分も聴いたことのあるものよりほかには、話すことができないのが普通人の技能であつたからである。童話の根原は要するに選択より以上の何物でもなかつた。たくさんある昔話の中から、比較的子供に似合わしいものをまず話すというのが精々で、それも効果の利不利よりは、むしろ理解の容易なものを採ろうとした。これが今日の童話というものの起り

と言つて、たぶん誤りはないと私は考えている。

ただしこの選択者の心理のうえに働いた外部の事情が、さらに三つほどはかぞえられる。その一つは話術の進歩を促した力の変化、すなわち子供だけが聴衆だと考へるときに、用語を解しやすくするはもとより、さらにまた叙述の省略と敷衍ふえんとが行なわれたことである。しかしこれは子供に対してだけでなく、話術は元来がそういうふうな、いつも聴衆の顔色によつて影響を受けるものであつた。たとえば色町の話はなまめかしく、軍談は騒々しいものとなつたのも、聴く人柄がしらずしらずのうち

に、話す人の上に働きかけていたのである。第二には話者に今日の作家のような特別の準備がなくて、常に自然の印象と記憶力とによって動かされていたことである。家庭の昔話の管理者は通例は女性であった。母ならば二十何年前に、婆ならば五十年ばかりも前に、かつて自分のおもしろく嬉しかった記憶が、子供の智慧とぎづくを見て復活する。ただそれだけがお伽とぎの資料であった。したがうて話者聴者の世代を重ねるほどずつ、興味は追い追いに大人のものから、子供のそれに移って行くので、いつの間にか話の要点がかわり、たとえば「桃太郎」でいう



ならば、割れて赤ん坊が飛び出したところ、またはどんぶりこんぶりと桃の実が流れてきた個条などが、中心かと思われるようになるのである。すなわち大人や青年がそんなものはつまらぬと思う時代がくると、別に童話にしようという気がなくとも、昔話は次第に子供らしくならざるを得ない。これがまた案外に古風な説話の、小児の間ばかりに保存せられていた理由である。

## 四 童話とその記録

そういう中でもまだ大人たちの間に、若干の昔話交換が行なわれている限りは、児童はまたそれをも傍聴して、始終二通りの種類を知って覚えていたのである。ところがさらに第三の事情として、夜話の衰微ということが重要であった。以前古い話を聴く機会であった庚申や日待の晩に、人がもう徹夜をする元気も余裕もなくなると、かえって昼日中そちこちに立ちよどんで雑談にふける風ふうは多くなつたが、これにはもう昔話のような長いものは

出てこなかった。それから一方には少し押売りの嫌いもあつたが、年長者が自分の知っていることだけは、ぜひとも語り残して行きたいという気持、これが書籍の増加と反比例に、追い追いと遠慮深くなってきた。以前はこの念慮は一般に今よりもずっと強かった。だから聴いてくれる人があれば、それをなつかしがり愛したのである。そういう篤志者が一人去り二人立ちのいて、しまいに残されたのが子供だけ、それも熱心にもっともつと注文するのは、概して小さい者ばかりになつてしまった。われわれの昔話は急激に童話化せざるを得なかった。

次第である。これを要するにこれら外部の事情変化がもしなかったら、われわれの民間説話はけっしてこのごろのような形にはならなかった。昔も仮に童話協会の会員という類の人が参与していたならば、無意味なたわいのないお話が、もう少し数多く出ていたはずであるが、事実は正まことにその反対であった。同じ話をそうたびたびは聴きたがらぬ兎、話をむさぼる子が少しせがむと、その次に出てくるのはたいていは「ためによくはない話」であるのみならず、子供専用のごとく心得られている「かちかち山」でも、または「瓜子姫」でも、その内容はすでに

はなはだ殺風景なものであつた。これを小児のために最初から、支度せられたと見ることは不可能である。しかも現代の作家たちはそれをそうかと思つてゐるゆゑに、自分らのすることの方が確かに改良進歩だという誤つたる自信を得るのである。二つの者はまったく別のものだ。これを童話という一個の名詞で、包括してゐたのがそもそもまちがつてゐる。

私はこの近世の経験に徴して、さらにまた神話のうちの昔話となる際にも、やはりおおよそはこれと似た外部事情の感化を受けて、一種の選択が行なわれたもの

かと想像する。それだから固有信仰のまだ生きて働いていた時代の名残が、そのわずかに残された破片の中からも、見出されるのではないかと考えている。この想像が誤まっていなかったら、ここにもまた一つの芸術と宗教との交渉点が、将来の考察者のために保存せられていたわけである。われわれの固有信仰が、儒仏その他の外来思想の影響を受けて、少しずつ移り動いていた間に、何かまだ明らかにしておらぬ動機によって、古い言い伝えの或るものは形を損じつつも永く残り、他の或るものは夙つとに文芸化して、興味をもって常民の間にもてはやさ

れ、それが後さらに都市の風雅階級に入り込んで、また別様の取扱いを受けるに至ったことは、そう大きな面倒なしに誰にでも認め得られる。ただ不思議と言ってもよい一つの事実は、多くの文人たちがいつも伝統の拘束を受けて、未だかつて文学をもつて、無より有を生ずるの術とは考えていなかっただことである。彼らの想像力には眼に見えぬ綜<sup>へ</sup>緒<sup>お</sup>がついていた。そうして自由奔放にそう遠くの空を飛び翔<sup>かけ</sup>ることができなかつた。鶯が春に啼き鶏が天明を期して高く唱うたように、詩歌物語にもそれが出現すべき場合は予定せられていたのみか、さらにそ

の言葉のもつ意味以上に、別に隠れたる連想の快い興奮の原因となるものがあつて、それがまたいたつて素朴なる前代の生活に筋を引いていたのである。芸術を天才の独創と解し、ないしは各期の社会生活がこれを生むと説く者には、これはたしかに厄介なる不思議だ。これをなんでもない当然の出来事だと心づくためには、やはりわれわれの子供らしい「桃太郎」を、頼んでこなければならなかつたのである。

今日のいわゆる五大お伽<sup>とき</sup>噺<sup>ばなし</sup>が、書冊の力をもつてほぼ現在の形に結集せられたのは、江戸期も半ば過ぎに出



来た、『雛乃宇計木』<sup>ひなのうけぎ</sup>ということになっているが、あのころは支那の小説類まで翻案せられていた時代で、何を書いてもよくまたなんと改造しても自由であつたらうに、実際は新聞の雑報などと同じ程度に、おおよそあのころにおける都市の昔話の退歩した状態を、ありのままに映写している。しかもそれが今日の標準型として、さもさも大昔からこの形をもつて伝わっていたかのごとく、多くの人をして信ぜしめたのは、まったく文字の魅力とも名づくべきものであつた。記録はただ単に筆者のいた時と処とに、そういう話し方もあつたということをして

知らしめるのみで、二つある場合に古い記録の話の方が古いとも言いきれないことは、『宇治拾遺物語』と『醒睡笑』と、二つの「瘤取り」話をくらべて見ただけでもわかる。この両度の採集の中間には四百年ばかりの時間が挟まっている。同じ一つの昔話は一方に誰かの手によって文字になっていくとも知らずに、なおこのような久しい歳月をどこかに前の形をもって保存せられていた場合もあったのである。五大お伽の名称は明白に誤っていた。これはただ数多い昔話の一つの、偶然に筆とる者の耳にとまった、小さな変化の一例というに過ぎなかった

のである。この中でも「花咲爺」などは比較的その沿革がよくわかっている。これは昔話の最もありふれた形で、われわれの仮に隣の爺型と名づけている種類に属することは、前にいう「瘤取り」なども同じである。いくら一生懸命に真似てみようとしてみても、生れつき備わった福分をもつ者、または心がけがよくて神に愛せられている者にはかなわないということをし、裏表二つの極端を並べ説いて、効果を挙げようとした話であるが、これにまたいろいろの小別があつて、犬を大切に飼ひ育てて莫大の財宝を得たというものにも、黄金小犬のごとくただ金の粒

をひり出したというのと、真似する唱えごとのいくつかある複雑なものがあり、いずれもみなその小犬の出現と成長とに、元は奇瑞の中心を置いていたことは「桃太郎」と似ている。ところが「花咲爺」にはその点がもう省かれていて、しかも枯木に花を咲かすというだけは違っているが、灰を蒔くというところまでは越中の「灰蒔爺」、奥州の「雁取爺」と同じだからその前後の整うている後の二者よりは新らしいことがわかる。それから終りの殿様に尻を斬られたという部分は、今一つの隣の爺型の「屁ひり爺」と共通であるが、これも屁ひりの方に

は土地によって古い形があり、もとは山の神との交渉を語っていた話であった。それを忘れてしまった「花咲爺」は、これらの爺話の片端を切ってつないで、後に結構したものと断定して、たいていはまちがいがないのである。

## 五 赤本の災厄

それからまた「かちかち山」、これは三種の昔話の継ぎ合せということがほぼ証明し得られる。その中でも知謀に富む兎が愚直なる狸を欺き苦しめるといふ一条は、

世界共通の動物説話の、殊によく知られている部分で、  
ここではただ狸がそのようにまでひどい目に遭わされる  
理由を、爺の名代の仇討とした点がちがっているのであ  
る。最初その狸が爺に捕えられた事情なども、ちかごろ  
は至極手短かに述べることになっているが、以前はこれ  
がまたまとまった一つのお話であって、要点は石の上に  
餅を塗っておくのを知らず、いつものごとくその石の上  
に登って、爺婆を悪口しようとして失敗したことになる  
ていた。そういう愚な狸が中途において婆を誑あやむき殺し、  
その婆に化けて爺の帰りを待ち受けていたなどというこ

とは、少し考えてみれば不調和は争えないが、この部分がまた北欧の「赤頭巾物語」と対照すべき、われわれの「瓜子姫」譚の骨子であった。ただ彼には「糠屋の隅を見よ」ということを、家の鶏が鳴いて教えたに反して、これでは狸がみずからそういつて遁にげ去ったという点を異にするのみである。この三通りの昔話は、今でも独立して方々の田舎には行なわれている。「かちかち山」は単にこれを省略しかつ綴り合せたという以上に、これと  
いう変化は加えていないのである。

次に「舌切雀」と「猿蟹合戦」とであるが、この二つ

だけはあるいは古くから、こういうまとまった形で伝わっていたのかと思つてみると、それがやはり少しずつあやしくなつてきたのである。雀報恩譚は朝鮮にもあるという瓠ひやうの米、柿の種の方は猿蓐との餅争いなどから、筋を引いていることは明らかであるにしても、ただそれのみでは話がこのように展開するわけはなかった。それには他に今一つの系統のこれに参加した昔話があつたことは、強いてものものしい弁証推理を備わずとも、ただ追いつきの採集資料のみによつて、自然に判明しようとしているのである。今日はまだ何人も心づいていないよう



だが、雀と蟹との二つのお伽噺は、相互にも関係をもち、また桃太郎の話とも似かような点が若干ある。少なくとも「桃太郎」一つの成長過程を つまびら 詳かにすることによって、他の二つのものが今の形に変化してきた理由も、説明し得られるように私だけは信じている。それでいずれの側面から考えて行っても、結局は同じところに落ちつくのかは知らぬが、同じことならば自今比較の材料がやや豊富で、手を空むなしうして今後の報告を待っていないなくとも、ある程度までの仮定が立てられる部分から少しずつこの問題に近づいてみようとしているので、私の目的は

ひろく民間説話の世に伝わり、また案外に改作増補を受  
けずして、今まで保存せられていた事情を知るのを第一  
段とするのである。

今ある「桃太郎」童話の言い伝えの中で、どの点とど  
の点とが特に昔から重きを置かれていたかということ  
は、もちろん人によって見方も違ふであろうが、少なく  
ともその個々の要素には、類例の多いものと稀なるもの  
と、国の内外を通じて分布のひろいものとそうでないも  
のと、非常な差等のあることだけは認められる。たとえ  
ば桃の実が割れて中から子が生れたということは、日本

の「桃太郎」以外にはないらしいに反して、犬やその他の動物に援けられて、大きな仕事をした話は他国にも多い。犬が猫を嚇し、猫がまた鼠を駆使して、紛失した宝物を見つけさせたという話はわがくににもあり、『西遊記』の三蔵法師までが、犬猿猪の半ば人間の形をしたのを伴につれて遠征し、途々いろいろなしくじりや仲間喧嘩のあったことを笑話の種にしている。遠い諸民族の間にもこの点は相似たるものが多いが、その中でもローマの博物館などにいくつも陳列せられているミトラ神の石像などは、猛牛を退治しているのは桃太郎同様の少年で

あり、これを援けているのは犬と蝸さそりとであつて、何人  
が見てもこれを動物忠誠譚の古くから世界的であつた証  
跡と感ぜずにはいられぬのである。説話の英雄が隠れた  
る約束により、もしくは恩義に報いんとする動物の助勢  
を受けて、非常な難事業に成功したということとは、とに  
かくに日本ばかりの伝承ではなかつたのである。

日本の特徴というのはただその英雄の名前であり、ま  
たその出現の様式であつた。桃が川上から流れてきてそ  
の中に赤兎があり、それで桃太郎と名をつけたという点  
ばかりは、隣近民族にもその類似のものを発見せられて

いないから、多分はわがくににおいて新らたに出現したものであり、したごうて同胞国民の間に、その原因を探り求むべきものであつたらう。見のがすことのできない一つの事實は、この点がかねてわれわれの固有信仰の、かなり大切なる一つの信条であつたことである。『玄同放言』などには和漢の多くの書を引いて、桃の中から桃太郎の生れる原理のようなものを説明せんとし、それに推服した人も折々あつたようだが、仮にそんな想像が正しかつたとしても、実際は大したことではなかつた。不思議な赤ん坊は必ずしも常に、桃の中からはかり飛出して

いたのではないからである。「瓜子姫」の昔話は少なくとも「桃太郎」と同時に並び行なわれ、九州中国にも稀に伝わり、東日本はほとんど到る処に保存せられていた。ただそれが文筆の士に採録せられなかつたゆえに、人が久しくこれに心づかなかつただけで、その代りにはまたいわゆる五大お伽噺に見るような、新奇なる潤色を受けずにすんだのである。

## 六 桃 と 瓜

奥州に行なわるる「瓜子姫」などは、その発端がよほど『竹取』のかぐや姫と近くなっていて、末は今一つはかなり重要な説話につながっている。紫波郡の例を見ると、爺と婆が嫁入支度をととの調えに町へ行つた留守に、瓜子姫は一人で佳い音を立てて機を織っている。そこへ山姥がやまうばやって来て作り声をして、指の入るだけでよいから戸を開けるといふ点は、タリムの狼と小羊やペロールの赤頭巾などともよく似ている。この山姥は他処ではア

マノジャクともなっているが、それが姫を殺して小豆餅をこしらえ、自分は姫に化けてその餅をかえってきた爺と婆とに食わせ、悪口を言って逃げて行くところはすなわち「かちかち山」であって、別の多くの例においては雀鴉または鶏が啼いて事実を親たちに教え、即座にアマノジャクは復讐せられたことになっている。姫はそれと同時に多分復活するというのがもとの話し方であつたろう。今でも樹の梢に縛られていたのを、助けおろされたというふうに話す例も少なくはない。

さてこの大きな瓜と大きな桃、それが水上から浮いて



流れてきたということは、小児にはもとより感じのよい言葉には相違ないが、要点はむしろ「大きな」ということではなかったようである。もとはおそらくは桃の中から、または瓜の中から出るほどの小さな姫もしくは男の子、すなわち人間の腹からは生れなかったということと、それが急速に成長して人になったということ、私たちの名づけて「小さ子」物語と言おうとするものが、この昔話の骨子であったかと思う。後世のいわゆる「一寸法師」、古くは『竹取』の翁の伝えにもそれはすでに見えているのみならず、『諸社根元記』の載録する「倭姫古伝」の

破片にも、姫が玉蟲の形をして筥はこの中に姿を現じたもう  
ということがあるのである。それから今一つは水上に浮  
んできて、岸に臨む老女の手に達したということ、これ  
がまた大切なる点ではなかったかと思う。海から次第に  
遠ざかって、山々の間に入って住んだ日本人は、天から  
直接に高い嶺の上へ、それからさらに麓に降りたもう  
神々を迎え祭る習わしになっていた。だからまた谷水の  
流れに沿うて、人界に近よろうとする精霊を信じたので  
あった。賀茂の瀬見小河の丹塗矢にぬりのや、出雲の加賀窟の黄金  
の箭やも共にそれであつて、その結果は戸の隙間からさし

入った日光の金線が、人間の少女の身を射た場合と同じ  
 だったのである。「桃太郎」の桃が「瓜子姫」の瓜より  
 も後のものであつたことは、そう多くの臆測を借らずと  
 も容易にこれを認めることができる。瓜類が中うつろに  
 して自然に水の上を浮き漂う事實は、非常にわれわれを  
 してその内にあるものをゆかしがらせていたのであつ  
 た。後世のうつぼ舟説話を成長せしめた元の起りには、  
 新羅しんらの朴氏ひくの始祖が瓠ひくわいに乗って、日本から渡つてきた  
 というような例もある。これと白麁かがみの皮で作った舟に乗  
 り、鷓鴣さむらいの羽衣を着て、潮のまにまに流れ寄つたという

われわれの小男神の物語とをくらべ合せてみると、最初異常に小さかったということが、その神を尊くまた霊ありとした理由であつたことは察し得られる。

これが桃太郎の鬼ヶ島征服の話と、複合するに至つた主要な点のように私は思う。ドイツの人たちは人文神などという語を設けているようだが、われわれの説話の上代の英雄にも、彼と共通した運命の前定があつた。常人すらなおとうてい企てがたしとする難事業を、はじめは普通以下のごとく見えた者が、なんの苦もなく安々となしとげた。これ奇瑞でありこれ天意でなくしてなんであ

ろう。すなわち一種族の幸福を指導するの力があつたのも偶然でない。ゆえに伝うるに足る。また伝えざるべからずという考え方を、昔の人たちはしていたらしいのである。だからアジアでもヨーロッパでも、現在知られてゐる英雄の成功譚には、単に小さくて弱々しい者であつたという以上に、非常な貧乏人であり、極度の惰なまけ者であり、または少なくとも外見には法外な魯おろか者でもあつた。この四つの条件の二または三を兼備して人から省みられなかつた者が後に偉い事をしてゐる。これをただ桃や瓜の中から飛出したというだけにしたのは、われわれ

の方の単純化であつたかも知れない。とにかくに国内に瓜や鶯の卵や竹の中から出た例もあることを知らずに、無暗に子供のように桃というただ一つの特徴をとらえて、桃の話ばかりを捜して見ようとしたのが、『玄同放言』とその随喜者たちであつた。そんな比較などはしてもらわぬほうがよっぽどよかつた。

## 七 妻もとめ

比較をするくらいならば異なっている点も考えてみな

ければならぬ。たとえば遠征の目的のごときも、日本の昔話の方はやはり単純化している。西洋の「桃太郎」たちの大旅行は、必ずしも財宝を持ってかえるというためばかりでなかった。むしろそれを手段としてよき配偶者とよき家を得、さらによき児を儲けて末永く栄えんとしているのである。われわれの側でも瓜子姫だけは、この幸福なる婚姻をもつて結末としているものがあるが、あちらでは男性の冒険者も、同じくその珍らしい宝物を持つてきて、終に王様の聳となった話が多いのである。察するに近代の「桃太郎」は子供を主人公にしたというよ

りも、むしろ子供にのみ聴かせる話であつたために、計画をもつてこの重要なる妻覓まぎの一条を省いたのであつた。奥州民間の桃の子太郎というものには、地獄から手紙を持って鳥が来たので、この遠征を思い立ったというのがある。そうして黍団子を携えて行つて地獄の門番の鬼を懐柔し、地獄のお姫様を連れて逃げてくる。それを大鬼が火の車で追うてくるというなどは、すこぶるまたお伽の「御曹司島渡り」とも似ている。桃の子太郎の桃は夫婦の者が花見に行っていた折に、女房の腰のあたり  
に転がってきたことになっているが、それと近い昔話に



はスネコタンパコというのもあった。すなわち子を禱<sup>いの</sup>る女房の臍<sup>すね</sup>から生れたという親指の頭ほどな小さき子であつて、これも長者の娘を嫁にもらいに行つたということが、かの「一寸法師」の草子と共通の話し方を具えている。信州木曾の小さき子塚の伝説というものは、すでに破片と成つて元の姿を究めがたいが、あまり小さいので臼に入れて育てたといひ、あるいは笠の蔭に蔽われて見えなかつたということだけは残っている。ところがこれがわがくにの神子譚の、いたつて古い形であつたとみえて、九州にもまた東北のそちこちにも、神に禱<sup>いの</sup>つて授けられた

申し兎が、笠の中に蟠わだかまった小さな小さな小蛇であつた昔話が伝わっている。これも大きくなつて妻求めをして長者の家を訪問することは、他の多くの蛇聳入話と同じきものがあり、終りに花嫁の力によつて壮麗なる人間の若者の姿に復したと言っている。書伝はこれを逸してすでに年久しいけれども、われわれの祖先の間にはその説話はかつてひろく流布していたらしいのである。大和の三諸岳みもろの靈神との因縁を語り伝えていた小子部ちいさこべのむらじ連氏は、その家名の由来として別の説を録進しているが、『日本雲異記』の最初の数条を読んでみると、同じ語部かたりべは

また頭に蛇を纏わせた霊童の誕生をも説いて、上代の小さ子譚を管理した者は、この家もまたその一であったことが察せられる。私はかつてこの問題を細叙して、古伝も時あつて信ずべからざる場合があるという説を立てた（参照『民族』二卷四号「若宮部と雷神」）。それはまだ十分なる論拠とは言われぬが、少なくとも小さ子出現の昔話は古かつたのである。

それからなお一方の惰なまけ者と貧乏人とが、美しい上臈えを妻に獲た話、これも同じく太郎という名をもって日本に行なわれている。古い記録では「物草太郎」の草子、

枕もとの団子も拾って食おうとせぬくらいのツクなしであつたが、後によき妻を得、かつ立身してさらに神となつた。隣の寝太郎を聳にとれという話などは、私たちも小さい時から聴いているが、周防ではそれが寝太郎荒神の縁起と化して土着している。沖繩ではこれとよく似た話が『遺老説伝』に出ており、さらに遡って『宇治拾遺』の「あめが下のみめよし」などは、二目と見られぬ面をしたならず者であつた。これがいずれもみなやすやすと長者の聳になる話であつて、いわば身に負わぬ大望とその案外な成就とが、よほどはやくから説話の興味を中心

をなしていたのである。こちらの類例ならば外国にも幾つかを見つけ得られる。もちろん笑話となつてからはこれをもてはやした動機も變つたろうが、何にもせよこれだけの結構をあえてし得ざる人々が、すでに話の趣意を忘れてしまつても、なお久しくこれを語り伝えていたのだから、その一つ以前の起りというものがなくてはならぬのである。西洋の学者たちには、非常な労苦をもつてこの根源をつきとめ、かつこれを証明しようとしている人も多いようだが、氣の毒ながらあちらにはもうその資料が乏しくなつている。これに反してわれわれの方では、

まだ幸いに同じ母語の圏内に、いろいろの比較に供すべき活きた昔話をもっている。活きたということとは昔話には似つかわしくないが、とにかく純乎たる文芸の目途から、これを改作しようとした者のなかつた話し方が今なお凡人大衆の間には伝わっているのである。橋はもうなくとも飛石だけはある。われわれはそれを踏んで神話の彼岸まで渡って行けるのである。最も簡単な一語で結論を下すならば、こういう昔話の起りは古かつた。すなわち或る最高の意思もしくは計画の下には、貧しい大工の女房の腹からでも、イエス・キリストは生れ得たと同様

に、いたって賤しい爺と婆との拾い上げた瓜や桃の實の中からでも、鬼を退治するような優れた現人神あらひとがみは出現し得るものと、信ずる人ばかりの住んでいた世界において、この桃太郎の昔話も誕生したのであった。それから以後のいろいろの変化は、単なる成長でありなしは老衰であって、われわれはこの一つの生きて行くものに、新たな生命を賦与する力はもたなかったのである。

## 八 昔話の本の姿

この推定は今はまだ大胆と評せられるかも知らぬが、これを側面から証明し得る資料に、前にも一言しておいた蛇聳入譚、すなわち説話流伝の第二の様式によって、固有信仰の推移のいくつかの段階に在る口碑と並び行なわれて、今もその間に細かな比較を許さるる説話がある。われわれの「桃太郎」は幸いなことに、これとも若干の連絡をもっていた。神が小蛇の形になって、人間の美女に求婚したという話は、上代の百襲ももそと止々どど媛ひめの記録にも残



っている。すなわち錦の文ある小さな蛇が、女のたつての望にまかせて、櫛笥の中にその姿を現じたといふので、その神がやはり小子部連の祖が迎え申したと称する三輪山の後の高山、三諸岳の大神たる大物主おおものぬしであった。これなどは明白に神が小蛇の姿になって現われたので、蛇が神として拝まれていたのではなかった。単に人間の娘には蛇としか見えなかつたといふだけである。しかるにそれをただ霊ある蛇体が、人の美しい少女を恋い慕うものと解するようになって、次第にわれわれの忌みは怖れとなり、これを災難のごとく厭い避けて、終には祈禱や武

勇の力をもつて、撃退しまたは報復したという伝説を生じ、さらに一方には白を負うて水に墮ち沈み、あわれな辞世の歌を詠んで流れたという、猿聳入の童話をさえ生ずるに至った。これ疑いもなくこの国人の信仰の変化の痕あとであつた。

この美しい錦の小蛇という想像の起りも、私たちにはほぼわかっている。これは今でも稻妻の名をもつて呼ばれる電光の形から、これを太陽がこの世に通おうとする姿と考えるに至つたので、あるいは黄金の箭とか丹塗りの矢によそえたこともあつたが、実際に天から人界に降

ってくる火の線は、蛇のようにうねりまた走っていたのである。次にはその光の蛇が妻を覓もとめんとした目的も、日本でならばまだ跡つけ得られる。すなわち人界に一人の優すぐれたる児を儲もけんがため、天の大神を父とし、人間の最も清き女性を母とした一個の神子を、この世に留めようがためであつたらしいのである。蛇聳入説話の一要素、一方これがまた伝説の中心として、意外に年久しく信ぜられていた一点は、当の本人の妊める少女、もしくはその血族や従者が立聴きをしたことであつた。龍蛇は鍔てつぱり針の毒に苦しみ悶えつつも、もはや人間に胤を残した

から、死んでも憾みはないなどとうめいていたというのは、痛ましい古信仰の衰頹の影であつたが、しかも伝説の場合においては、これを保管する者は必ずその美女の出た家、すなわち水の神に奉仕した神職の家であつた。彼らの何人かが立聴きをしたと言わなかつたならば、いわゆる蛇聳入の神秘なる理由は、人間社会に知られかつ伝わらないはずであつた。今日の伝説は通例外部の噂として流布しているのであるが、私どもの経験ではその家でも多くはこれを否認せず、また必ずしも恥じたり迷惑に思つたりしてはいないようである。今ならばとうてい

あり得ないそういう不思議な話がつきまとうているのも、つまりは家が古く、かつ土地との関係が深いからだ、人も解しわが家でもそう見ている。また一朝一夕にはこれを無いものにしてしまうことができぬくらいに、根強くかつ一般的なる信仰でもあったらしいのである。

日本の小さ子説話が、最初小さな動物の形をもって出現した英雄を説き、または奇怪なる妻問いの成功を中心に展開しているということは、それが右申す神人通婚の言い伝えの、まだ固く信じられていた時代に始まっている証拠として、われわれにとってはかなり大切な要点で

あった。しかるにその点をいわゆる標準お伽の「桃太郎」のみが、何の考えもなく取除いてしまっていたのである。それと同様に「一寸法師」でも「物草太郎」でも、日本でならばそれが最後に神と顕あらわれて、永く祀まつられたというわけもわかるのであるが、外国の民間説話はこれを単なる凡人界の出来事とし、ただ一個極度の幸運児の立身出世をもって、話の結末をつけることになっているために、もうその起源を究めることがだいぶ困難なように見受けられる。つまりはとくの昔に神話から分離してしまつて、他にはその連絡を暗示するだけの、なんらの口碑

も保存せられておらぬゆえに、仮に見当はついても安全にこれを論証する途がないのである。この意味から言つて、われわれはまだ頼もしい邦に生れ合せたと言ひ得る。むやみに洋人の通つた跡ばかり踏んで行こうとさえしなければ、これほど変化しきつた「桃太郎」の中からでも、なおこれを語りはじめた人たちの心持を探ってみることが出来る。神から送られたわれわれの濟すくい主は、いつまでも変装していて最初は侮られ、後には必ず奇蹟によつて発覚するものと信じられていたらしいのである。日本での今一つの例としては、「山路さんろの牛飼」と称する古い

歌物語があつて、舞の本の『烏帽子折』えぼしおりにも記録せられている。これは舞の手振が非常におもしろかつたと見えて、幾度か後世の浄瑠璃の題材ともなっているが、要点は古今おおよそ同じであつた。牛に乗って笛を吹く草苅童は実は天子で、長者の娘を恋い慕うて、身を下賤にやつしてはるばると都よりお下りなされた。八幡の祭の日の流鏑馬やぶさめに、何人も知らなかつた射術の神秘をお示しなされたら、社殿もこれがために動揺し、すなわち神よりも尊い御方なることが現われたと語っている。それを『用明天皇職人鑑』などと題したのは、姫を娶めとつてその間に



生れたもう太子を、日本の太子の中の最も賢明靈異なる聖徳太子の御事だと推定した結果であつたが、それは歴史とは合わぬことであるがゆえに、歴史の学問が少しでも進むと、これを改訂してできるだけ信じやすくした。

だから奥州の菟田宮には日本武尊、越前羽後では継体天皇、薩摩や土佐では天智天皇の御逸話と解して、しかも伝説として今もなおこれを信じたがつている。神が形を錦の小蛇と現じたまいしか否かによつて、末々の口碑はこれだけの大きな差異を生じたが、説話の蛇智入も伝説の用明天皇も、神が思いがけぬ姿をもつて人間に降臨な

されたという本の意は一つであつた。もちろんこれはすべて最初は非常に崇厳なる神秘であつて、凡人のけつして、常の日に口にすべからざる教訓であつたろうが、歌と舞姿とによつて年に一度、その記憶を喚び返す日のおもしろさに引かれて、後に信仰がゆるめば人はこれを娯楽の用に供した。これが芸術の分立して、独自の発達をとげた因縁であつたろうと私は信じている。酒や美女の紅粉が常の日のわざとなつたごとく、祭の日の語りごとはわれわれ遊宴の興を助け、舞は演劇となり、説話は童子の夜睡る前の慰みとまで零落しかつ変化し了つたので

ある。あるいは零落というのはあまりに尚古趣味にとらわれているのかも知れぬが、少なくとも今はこの程度にまで利用の途がかわり、また異なる人々の怡悦いえつの具となつたので、ちようど太古の偉大なる杉菜つくしんぼうが、今日の石炭になつたのと事がよく似ている。これは石炭の物理を研究する人には、あるいは何でもない事実なのかも知れぬ。しかし私のように杉菜の植物学、もしくはつくしんぼうの自然史を知ろうという者にとつては、微々たる一片の「桃太郎」昔話も、なお万斛ばんこくの感慨を催さざるを得ぬのである。



日本文学電子図書館

---

## 桃太郎の誕生

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：「現代日本思想大系29 柳田国男」  
筑摩書房

1965年 7月20日 初版第 1 刷発行

1973年11月20日 初版第12刷発行

---

日本文学電子図書館